

と本意也。此期にあはぬ門人の思いくばくぞや、と鳥にさめ鐘をかぞへて、伏見につく。ふしみより義仲寺にうつして、葬禮、義信を盡し、京、大阪、大津、膳所の連衆、披官従者迄も、此翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳來るもの三百餘人也。淨衣その外智月と乙州が妻ぬひたて、着せまいらす。則、義仲寺の直愚上人をみちびきにして、門前の少、引入たる所に、かたのごとく木曾塚の右にならべて、土かいおさめたり。をのづからふりたる柳もあり、かねての墓のちぎりならんと、そのまゝに卵塔をまねび、あら垣をしめ、冬枯のばせを植て名のかたみとす。常に風景をこのめる癖あり。げにも所は、ながら山、田上山をかまへて、さゞ波も寺前によせ、漕出る舟も觀念の跡をのこし、樵路の鹿、田家の雁、遺骨を湖上の月にてらすこと、かりそめならぬ翁なり。人七日が程こもりて、かくまでに追善の興行、幸ヒにあへるは予也けりと、人々のなげきを合感して、愚かに終焉の記を残し侍る也。程もはるけき風のつてに、我翁をしのばん輩は、是をもて回向のたよりとすべし。

於栗津義仲寺牌位下 晋 子 書

元祿七年十月十八日、於義仲寺、

追善之誹諧

なきがらを笠に隠すや枯尾花
 温石さめて皆氷る聲
 行灯の外よりしらむ海山に
 やとはぬ馬士の縁に來て居る
 つみ捨し市の古木の長短
 洗ふたやうな夕立の顔
 森の名をほのめかしたる月の影
 野かげの茶の湯鶉待也
 水(ウ)の霧田中の舟をすべり行
 旅から旅へ片便宜して
 暖簾にさし出ぬ眉の物思ひ
 風のくすりを惣くがのむ
 こがすなと齊の豆腐を世話にする

晋 子
 支 考
 丈 艸
 惟 然
 木 節
 李 由
 之 道
 去 來
 曲 翠
 正 秀
 臥 高
 泥 足
 乙 州

木戸迄人を添るあやつり
 茸わたす菖蒲に匂ふ天氣合
 車の供は、だし也けり
 澄月の横に流れぬよこた川
 負く下て鴈安堵する
 庵の客寒いめに逢秋の雨
 ぬす人ふたり相談の聲
 世の花に集の發句の惜まるゝ
 多羅の芽立をとりて育つる
 此春も折くみゆる筑紫僧
 打出したる刀荷作る
 四十迄前髪置も郷ならひ
 苦になる娘たれしのぶらん
 一夜とて末つむ花を寐せにけり
 祭の留守に残したる酒

芝 房 昌 探 胡 牝 游 蘇 智 吞 土 卓 靈 野 素 万
 柏 房 芝 故 玄 刀 葉 月 舟 芳 袋 椿 童 童 里

河風の思の外に吹しめり
藪にあまりて雀よる家
鹽賣のことづかりぬる油筒
月の明りにかけしまふ糸
秋も此彼岸過せば草臥て
くされた込に立し鶏頭
小屏風の内より筆を取亂し
四ツになる迄起さねば寝る
ねんごろに草鞋すげてくるゝ也
女人堂にて泣もことほり
ひだるさも侍気にはおもしろく
ふるかゝと雪またれけり
あれ是と逢夜の小袖目利して
椀そろへたる藏のくらがり
吞かゝるきせる明よとせがまるゝ

識々 這萃 許六 回鳥 荒雀 楚江 野明 風國 木枝 晋子 角上 去道 土芳 芝柏

ふとんを巻て出す乗物
弟子にとて狩人の子をまいらす
月さしかゝる門の井の垢離
軒の露庭敷たるかたがへ
野分の朝しまりなき空
花にとて手廻し早き旅道具
煮た粥くはぬ春の引馬
小機嫌につばめ近よる屏の上
洗濯に出る川べりの石
日によりて柴の直段もちがふ也
袋の猫のもらはれて鳴
里迄はやとひ人遠き峯の寺
聞やみやこに爪刻む音
七ツからのれども出さぬ舟手形
二季ばらひにて國の掛

臥高 尙白 昌房 丹野 丈艸 惟然 靈椿 正秀 回鳥 朴吹 角上 泥足 尙白 卓袋 芝柏

内に居る弟むす子のかしこげに
うしろ山迄刈寄る萱
此牛を三步にうれば月見して
すまふの地取かねて名を付
社さえ五郎十郎立ならび
所がらとて代官を殿
打鎗に水上帳を引かけて
乳母と隣へ送る啼兒
獅子舞の柏子ぬけする晝下
雨氣の雲に互やく也
在所から醫師の普請を取持て
片町出かす畠新田
鳥さしの仕合わろき昏の空
木像かとして倚子をゆるがす
三重かさねむかつく斗匂はせて

探芝 游刀 楚江 魚光 晋子 風國 支考 正秀 丈艸 昌房 臥高 之道 去來 泥足 尙白

座敷のもやうかふる名月
漣や我ものにして秋の天
經よむうちもしのぶ聖靈
かろくと花見る人に負れ來て
村よりおろす伊勢講の種
暖になれば小鮓のなれ加減
軍はなしを祖父が手の物
淵は瀬に薩埵の上を通る也
朝日にむきて念珠押もむ
幾人の着汚つらん夜着寒し
わすれて替ぬ大小の額
味噌つきは沙彌に力をあらせばや
かな聾の何か可笑き
ばらくと恨之助をとりさがし
顔赤うするみりん酒の酔

卓袋 角芳 牝玄 土芳 芝柏 這萃 臥高 晋子 正秀 支考 魚光 楚江 游刀 風國 之道

霜消て此道廣し西の山	同	朴	吹	菊	嵯	起の馳走	かな	堅田	貉	睡
木曾寺のゆめになしたる時雨哉	大津	木	枝	朝日	う	けて霜もまばゆし塚の前	同	同	重	氏
今朝獨泪をこぼす火鉢哉	セ、	這	萃	打	こ	けて指ぬき氷る泪かな	女	女	素	翠
さゞ波の時雨を聞か土の窓	大津	土	龍	な	ぐ	さめし琴も名残や冬の月	女	桑門	万	里
ちり際はもろき櫻の紅葉哉	セ、	暹	望	花	鳥	よせがまれ盡す冬木立	女	桑門	惟	然
むかし人といひて見廻る塚の霜	同	伴	左	花	桶	の鳴音悲し夜半の霜	女	可	南	
待うけて泪みあはす時雨哉		か	や	冬	の	月襟にうけたる泪哉	セ、	徹	房	
二七日廟參之悼句所々文通				手	を	つけば霜も湯と成泪哉	同	同	同	同
雪はれて徳の光やかゞみ山		岩	翁	木	兎	の目にも涙のしぐれ哉	同	同	砂	上
小野炭やあとに匂ひの残りけり	大坂	尺	草	力	な	く墓にかけよる時雨哉	同	同	蚤	鳥
冬の日や師に奉公の間もなく	セ、	牝	玄	冬	柳	かれて名ばかり残りけり	同	同	向	震
今はゝや悲しさかるゝ柳哉	同	吾	我	枝	折	て鳥の歎きや竹の霜	同	同	向	震
間違ふてあはぬ命や村時雨	同	松	泉	幻	に	みるは枯野の嵯哉	同	同	向	震
松の霜見ぬ世の形やひの木笠	同	朔	巫	力	な	き獅のあがきや冬牡丹	同	同	向	震
此かた見行來に見せん丸頭巾	同						同	同	向	震

朝霜や夜着にちゞみしそれもみず
 主もなき時雨の庵に讀ばかり
 くらつばに小坊のるや、さ聞えし作
 意佛になん。

大根引あとはうづまぬ名残哉
 三七日伊賀連衆追悼句
 京 夏 木

時雨るやおくへもゆかず筆なやみ
 鶯の子鳴にくゝる嵯かな
 聞て泣聲もとゞかぬ枯野哉
 寒菊やすゝぐ佛の膳の端
 夢みたか啼て飛ゆく浮ね鴨
 六疊に見残されたり冬の月
 塵塚や泪の紙に霜の華
 火燧から床のかけ繪を泪かな
 なき跡や時雨てたつる古障子

手向には何をかれたる菊畠	西澤	魚	日	佛	や	足もさゝれぬ置火燧	明覺	寺	尾	頭
冬桃のなき人しらぬ歎哉	山	岸	陽	和			山	岸	陽	和
山茶花の散煩はぬうき世哉	木	や	我	峯			木	や	我	峯
借着つる夜半もありけり丸頭巾	大坂	や	万	乎			大	坂	や	万
かろき身の果や木葉の吹とまり	猿	雖					猿	雖		
芭蕉く枯葉に袖のしぐれ哉	小川	風	麥				小	川	風	麥
紙衣の少しぼに浮むなみだ哉	植田	示	蜂				植	田	示	蜂
一生を旅の仕舞の時雨哉	井筒	屋	爲	醉			井	筒	屋	爲
茶のからの霜や泪のその一ツ	濱	式	之				濱	式	之	
何事もなみだに成ぬ冬の庵	中尾	槐	市				中	尾	槐	市
菊かれて側に小松も凋れけり	小童	長	年				小	童	長	年
たよりなや風もかく迄枯柳	津子	荻	子				津	子	荻	子
枯草に顔入て鳴男鹿かな	原田	乍	木				原	田	乍	木
笠を泣時雨なつかし北南	井筒	や	望	翠			井	筒	や	望

そのまゝに降を手向るしぐれ哉
聞とりて鳥も嘆くか山寒し
歎く手の香もふるふや水仙花
水鳥の遠きわかれや海の果

宇多都
大久保仙杖
松本氷固
内神九節

なにはへの飛脚、粟津よりかへりて、
亡師の遺書まいれり。

夢なれや活たる文字の村衛
手向せん茶の木花咲袖の下
限あるうわさばかりや散紅葉
はら／＼と泪かれ野の薄かな

いか半 殘
西島百歳
溝 水
來川烏栗

四七日をかけて普音文通之句

猿みのゝ袖のしぐれや行嵐
夢のあとが疊みしぞ夜着ふとん
待／＼ておもはぬ文に時雨哉
便なう霜にきえ行月夜哉

伊路 艸
同 團 友
同 空 芽
同 宗 比

みて漣や蓑笠の像に雪霽
玉しるを世に分置て木葉哉
語り合てともに悲しき霜夜哉
せめてその笠みて行んあられ笠
耳の底に水鶏鳴也冬の雨
枝川や一羽はなれて鳴千鳥
霜にちりて光身にしむ牡丹哉
手づからに木葉はく也塚の脇
明て啼冬の日影やかし座敷
鶉飼見し川邊も氷る泪哉
文臺に去ぬ影なり古頭巾

同 斗 從
同 芦 本
いせ 拔 不
同 廬 牧
尾州 露 川
同 素 覽
同 左 次
大坂 伽 香
みの 低 耳
伊豫 黄 山

枯尾花下卷

十月二十五日、共桃隣、出武江、而暨義仲寺、望芭蕉翁之墓、歎唱

いつの冬か風のうしろむきそめ、葛のはのおもてみし秋より春にわたり、杖にさめ笠に眠り、小蓑に病、
つるの浮世をなにはにして、枯野にあそぶと聞え給ひし一句を、今さらのうつゝになしぬ。其角はさ
る契ありてや、生前のため、後の事迄とりおさめつかへけり。遠き境の人はいまだしり及さずや。江
都に心ざしを盡せるたれかれ、ところ／＼に席をかまへて、追善興業のくさ／＼、袖に袂にひろひかさ
ねて、往々に歩みを忘れ、富士もみず、大井もしらぬ寒ぞらかけて、霜月七日のゆふづくよの程に、義
仲寺の家上にひざまつく。空華散じ水月うちこぼす時、心鏡一塵をひかされば、萬象よくうつる。此師、
此道におゐてみづからを利し、他を利して終に其神不竭、今も見給へ、今も聞給へとて、

此下にかくねむるらん 雪佛 嵐雪拜

十月廿二日夜興行

十月をゆめかとはかりさくら花
 しぐれの中に一筋の香
 鑑の手の二間は五疊くにて
 立居は見ゆる沖の船頭
 有明のはつかに白き山の裾
 眞鶉さそひて豆まはし鳴
 蜀黍の實をばそがれて畑中
 木舞あらはに手で土をぬる
 新川にまだ名もつかぬ橋のうへ
 雨のふる見て照くといふ
 存在に物をおしゆる田植ども
 膳にばらりと明る千鍛
 約束の茶の湯延してさびしがり
 赤い菊より黄な菊を嗅

嵐雪 氷花 百里 神叔 東潮 浮生 卜宅 舟竹 桐雨 月下 風洗 楸下 咸宇 牧人

上氣して吹れに出る秋の風
 客とならべて床をとる月
 ちる花も翁について廻るらん
 山吹もらふ顔ぞわすれね
 春雨に咄のやうな戀をして
 氣相のわるき時は文見る
 只あそぶ四十の内の樂坊主
 水享いとて夏冬もなし
 くたびれて勝手の手聞えけり
 位牌の前の火影靜まる
 眞實に蕎麥切打て送る也
 城の近くに旅ごもりする
 傘の外にまぎるゝ傘はなき
 夜半あるき母の氣遣
 あたゝかに風呂吹煮冬ユルの月

當歌 銀鈎 東潮 嵐雪 浮生 百里 氷花 嵐雪 神叔 東潮 百里 神叔 嵐雪 氷花 東潮

先度の雪に師走落つく
 來春を今から工む大工寄せ
 中山道は加賀で持けり
 一升を米の價のとうがらし
 さる代もありと語る老
 此たびはまいりあはづの墓の花
 無常の鐘のかすむさゞ波

滿座追善各焼香

なき人の詠めも四季の終哉
 見おさめの顔はいつ比雪の比
 悔前非

身をつめる悲しさをしれ冬の月
 芳しき人の香もあれ塚の雪
 風の外にあそぶや墓の月
 尋行てかれ野の草の根に語レ

百里 神叔 嵐雪 百里 氷花 專迹 綠子 氷里 浮生 舟竹 咸宇

佛や二度三度よむ月時雨
 かれ芦や名をかき寄る潮頭
 時雨にもさめぬ別れや夢咄
 芭蕉翁みまかりぬるに、跡をだにさ
 て、たびだつ人にこそつて待ける。
 秋風にたへてしばしは残りしも
 霜の芭蕉のあはれ世の中
 十月廿二日興行
 故人も多く旅にはつき、逆旅過客の
 こさはりをおもひよせて、
 儂やかなにはを霜のふみおさめ
 淡くかげろふ冬の日の影
 一面に起ふす小松風やみて
 よごれし馬を引出す也
 名月は夕飯早く過しけり

專迹 東潮 素イ 安適 桃隣 子珊 杉風 偕水 會良

どこやら輕き秋の帷子
皂莢に枝を分たる鴉の聲
細工に入ル古桶の底
心よき今の住持を憎みたて
三里がうちは景の鹽濱
此寒さあられか雪のふる曇
木綿の重み手にのせて見る
背戸傳來ては常く長咄
折角とれば蜩のから
やすくと平泉より木曾の月
丈幅せばき布の薄綿
眞白な陰は流るゝ岸の花
依のうへに燕あつまる
そろくと子をあゆませて春の空
晝にさがりて葺のこす屋根

序志 太夫 龜水 孤屋 子祐 利牛 白之 蚊足 李里 野坡 太洛 八桑 桃川 利合 野々

酒道具干ならべたる笠置川
風呂敷といて鉦鼓取出す
鳴ぬ問人をうかどふほととぎす
家のふるきを小利口に住
丁寧に又桃灯で送らるゝ
風なき雪の柳地につく
樋の口に苦耐ばかりかたまりて
白に手杵のせはしなき音
あかまへていふ程奢る月の宿
行脚かへりに更る秋風
よはくと葉ばかり多き菊の露
流れに添て雨あがる也
居間ながら六疊敷に爐を構へ
髻に白髪のはのかなる年
見開ばをのづからなる花微笑

支梁 湖松 桐奚 嵐戎 石菊 ちり 嵐竹 此筋 素龍 千川 楚舟 角蕉 杏村 濁子

香をむすんで朝かすみたつ

歌仙滿座普音之の吟

うらむべき便もなしや神無月
枯芝や聲も力もなきあらし
是非わかぬ枯野に草の種もなし
見るやうに頭巾をかけん庵の松
聲たてぬ歎きや霜のきりくす
菊かれて匂を惜む居士衣哉
山茶花を塚の頼みに植もせん
うき便望絶たり霜ばしら
茶の花は匂ひ手向んばかり也
見送りに夢に成けり今朝の霜
骨肉にこたゆるけふのしぐれ哉
霜消て蓬を庵のちなみ哉
悲しひを包みかねたる木葉哉

滄波 杉風 八桑 子珊 太大 湖松 子祐 太洛 序志 龜水 李里 楚舟 風弦 桃川

寺の花直にたむけん冬牡丹
はかなしや火燧咄も苔の下
初雪を思ひよらずの手向哉
かたみ哉粟津がはらの枯柳
その骸もかくやは雪の水仙花
むせぶとも芦の枯葉の燃しさり
ならべたる蠅床さびし冬籠
袖時雨無あみだ佛趣向哉
氷るらん足もぬらさで渡川
告て來て死顔ゆかし冬の山
花紅葉夢と小春に成にけり
錫杖にふみたがはざる木葉哉
泣くと目に吹當る木のは哉
紅葉ちり櫛は青し塚の前

義仲寺へ送る悼

野々 愚好 用陽 杏村 石人 會良 滄波 角蕉 法眼 露沾 山夕 直方 琴風 濁子

手向たる水もや朝水面鏡
時雨ふる白い卒都婆よ夕嵐
野ざらしの匂や十餘年年の霜
小菟や火にはなれたる身の凍へ
行人の徳や十夜の道ひろき
繪をみるや袖の雫の初氷
立されば心に消る塚の霜
力艸引切られたるなみだ哉
雪や霜尋ぬん笠の有所
枯蔦の哀や残る壁の系
寒菊の咲後れたる名残哉
哀しれ菊は戸口にかれて居る
こや形見菴の爐蓋に指の跡
何のかの便りの風や枯薄
五十二年ゆめ一時のしぐれ哉

壺 蛙 山 蓬 涼 葉 大 舟 左 柳 此 筋 千 川 淵 泉 支 老 支 淵 子 遊 糸 其 井 海 動 蓬 山 ち り

頭陀袋重きも袖のしぐれ哉
その塚はさそな枯野の土の色
心澄て頬に凝つく泪かな
凧の聲に檜原もむせびけり
十月廿三日追善
亦たぞやあゝ此道の木葉搔
一羽さびしき霜の朝鳥
碇綱縮なる月に浪ゆりて
野分の音のかはる元山
秋中に残らずつけし藏の壁
青苧の長を引上にけり
内かたは物やはらかな人づかひ
ほろ／＼雨の末は四五町
その形に紙で巻たる百合の花
籠の火けして庵たて寄

虛 谷 艷 子 馬 龍 素 龍 湖 春 素 龍 露 沾 萍 水 桃 隣 野 水 孤 屋 利 牛 杉 風

雲水の身はいづちをか死所
帆をもの舟は疊也けり
山陰にもらひあつめし竹植て
盆を待すに急な法躰
膳所の月片隅もなく照り渡り
二年つゞいてあたゝかな秋
花紅葉老かゞまりて押炙
酒といはれて少やはらぐ
聞ば見ばお下屋敷の奥坐敷
立くづれたる雨の蚊柱
成あいにありけば旅も苦にならず
子供の勢のたらぬ柿園
長々の靱借り返す力得て
露霜ふかき大名の寺
約束の皆ちがふたる後の月

素 堂 筆 合 利 野 倍 子 桃 隣 杉 風 利 牛 孤 屋 岱 水 桃 隣 利 合 野 坡 杉 風 利 牛

財布でぬぐふ泪わりなき
のし餅の上にかさぬる配り餅
旦那が出れば賑やかになる
山／＼を信濃の者に語らせて
本の通りに鼠算用
高い木の並びし下が猶涼し
小あげをかけてゆらぬ駕籠かき
二三人伊勢上りの物もらひ
節句の禮におそなはり来る
袖に今師の好れたる花の枝
雲優美なる春の夕昏
十月廿三日
晋子亭にて興行
今はくも雪のはせをの光哉
かへらぬ水に寝て並ぶ鴨

孤 屋 岱 水 桃 隣 杉 風 野 坡 孤 屋 利 牛 野 坡 岱 水 桃 隣 利 合 仙 化 是 吉

冬の月黒き衣類は影鈍て
拭ひのこせる階のくま
一もとの柏檀廻れは二十足
晝の鼠の穴をわするゝ
その向も世々の隣の日をうけて
力もよはく鉦しめる音
供人を近く召るゝ駕籠の内
雀の枝を鷺のあらそふ
日に添て宮木の屑は泥に朽
むかしもこゝが橋本の宿
合羽なき馬より歎く雨曇
小僧になりていさみつく顔
扇から湯銭さし出す月の昏
側のたばこの匂ひ望まれ
花の雲德行迄と舟よばひ

介 柴 湖 神 楊 枳 山 全 沾 李 神 楊 柴 仙 楊
我 雫 月 叔 水 風 之 峯 德 下 叔 水 雫 化 水

ちいさき松のかすむ洲の入
青貝(ナ)の卓もふるびて春の色
日光 椀に似あふ芳飯
かしまる事を忘れし年の程
手紙のおくは名やら判やら
唐物と見すえし茶入袋して
あらしき踵キヒスに羽二重の裾
墓のごと雪を並べて惜みけり
馬を土戸にはさむ口取
かねことの所くを聞はつり
生キたる身をぞ戀の入物
午チの月に烏帽子の影の直ツ也
二行に持て並ぶ虫籠
聲もなく朝の鹿の小草喰ク
つかみて鍋にはかり込ム米

李 湖 柴 介 神 枳 湖 介 沾 仙 楊 李 全 神 由
下 月 雫 我 叔 風 月 我 德 化 水 下 峰 叔 之

肩癖の外に跡なきうしろ見よ
はしりながらに牛除る聲
常にえむ連衆拈花の花に寄
垣せぬ桃を人の敬まひ

深草のおきな、宗祇居士を讀してい
はずや、友風月家旅泊さ、芭蕉
翁のおもむきに似たり

旅の旅つるに宗祇の時雨哉
落葉見し人や落葉の底の人
爐開になき人來ませ影ぼうし
凧におもひ泣かせよ猿の面
月雪の近江の土や三世の縁
檜笠いづれ冬野の面かくれ
凧のなにはや夢のさめどころ
初しぐれ笠より外のかたみなし

仙 介 沾 素 枳 介 專 湖 柴 暮
化 我 德 堂 風 我 吟 月 雫 子

かみな月根ざしは残るはせを哉
歸花菊をむかしの翁かな
力艸とりはなしたり朝嵐
果は霜夢に逢にし芭蕉哉
十徳の袖はなみだの氷かな
霜ふかき庵ぬしなきうつゝ哉
句の神や此十月の世のくやみ
さゞんくはや難波へ向てつかみざし
驚きて霜の蜜柑を手向哉
残る名の手向にむせぶしぐれ哉
雪の夜をおもひ忍ぶや名付親
窓の雪はらひ果たる拂子哉
青石の陰もあはれや木葉搔
終の野に捨すましけり霜の杖
又も來ぬ跡に立けり霜柱

拙 闍 山 寒 秋 女 和 芝 一 是 林 李 龜 横 景 萍
候 指 蜂 玉 色 水 薙 雀 吉 也 下 翁 几 桃 水

ちからなや膝をかゝえて冬籠
竹の繪を掛て悲しき時雨哉
油火の消て悔むや冬籠
すがりつく枝も枯たる柳哉
泣籠る冬や今年の廻り合
深川にとりわけ鳴や友千鳥
目のさきにまだちら／＼と木葉哉

義仲寺に参り、亡師の塚の墓に舊
來を語らんす。そも隱逸の志につ
かへ、一たびは笈のたすけともなり
ぬ、今更に遠里を隔て、かく所の昔
の下に、むなしき名のみ聞へけるを、

月雪に假の庵や七所

十一月十二日初月忌

丸山量阿彌亭 興行

泣中に寒菊ひとり耐へたり

野 孤 利 疎 借 石 利
坡 屋 牛 雨 水 菊 合

挑 隣

嵐 雪

向上躰を雪の明ぼの
澁壁のひの間を遅く扇かせて
車にはこぶ藪の疊ナリ
簾賣聲に告たるほとゝぎす
かし傘としれて大文字
名月に持参の一種おもひ付
折かへすほど廣き桐の葉
白粉の鏡にかゝる秋の霜
火燧ふとんの引たらぬ中
長谷越の山にあいたる昨日けふ
榎の木の間を海をたまさか
吹たをす屏風を膝に押直し
鼓かゝへし大がゝりなり
のまぬかと盃みする人遠し
岸をすらせて舟や行らん

桃 岩 晋 龜 横 尺 松 去 正 曲 筆 轡 心 暮 巨
隣 翁 子 翁 几 艸 翁 來 秀 翠 士 圭 四 海

蜻蜒の衣紋つくるふやどりやう
湯あがりの身の冷かに成
弓はりのひかゆる雲を窺はれ
山家の世帯氣散じな事
獅子の座にみつる心や花の陰
杖に用なき我老の春
うらゝ成和爾や堅田の浦傳ひ
鹽辛桶になれし鈎
雨の日は大工もあそびたがる也
さてはちんばと見ゆる後、目
のり物は音羽の瀧の下に置
あたゝめさせよその藥鍋
かけ乞の金をかへすも至極成
上座の聾を覗く透合。
風の香もいと扇のきしる音

荷 野 風 集 晋 重 遲 轍 桃 嵐 横 荷 去 尺 嵐
兮 童 國 加 子 勝 望 士 隣 雪 几 兮 來 艸 雪

水もすめたる飛彈曲の目
かしこまる受戒の兒の白素絹
能はじめよと使かさなる
あた腹の起り出たる夜の月
櫛子明れば朝がほの蔓
秋風や看坊持のまゝならぬ
衣桁の小袖落る音する
生かほる齒をゆるがして物おもひ
たのまぬ神はほめも罾りも
長旅に持あぐみたるつるべ鮮
一日 鎌をふり上る數
たじろかぬ松を都に見直して
夜の寂覺やぬす人もなし
よごれても禿たる杖杖衰也
たねや乞れて残す鶏頭

岩 轍 晋 集 桃 巨 風 晋 尺 暮 心 桃 岩 横 巨
翁 士 子 加 隣 海 國 子 艸 四 圭 隣 翁 几 海

牛祭晝からしての女子客
身なげて酔のさむる月影
折ためて荷ひながらにちらす花
年越すます坂の櫛挽
肥肉なものは春からじゆつながら
梵天寒く立し川小屋
灯も閨を添て光るらん
不思議に姫をちそうせらるゝ
白粥のさむる間しばし思ひ侘
書そこなひもろふ短尺
三里四里機嫌まかせの旅の空
焼ながら干すぬれ木也けり
此あたり此家ばかりこけら葺
をのが法華を燈たうとき
湖を鑑にみたる山の景

尺 艸 望 士 荷 集 暮 嵐 去 岩 晋 野 轍 風 集 尺
艸 加 國 士 童 子 翁 來 雪 四 加 兮 今 來 兮

夢といふ字を夢の世の額
宵の月脚半もとかず膳待て
どこともなしに蜜柑焦るゝ
かし鳥の椋はくはずに梅もどき
こしもとが尻たゝく飼猿
おもはゆき乗蠟燭の立かねて
遊行の前にならぶ十念
産るゝや聲もたしかに男の子
とりちらしたる朝夕の酒
節季候の年ほどありて拍子ぬけ
憐み四方に施薬合する
形よりこびたる佐渡の人心
薄の中に得たる著
鬼が手に明さして置月の洞
うは着に君をかこふ露霜

嵐 桃 巨 暮 岩 轍 集 晋 風 横 尺 桃 暮 心 嵐
雪 隣 海 四 翁 士 加 子 國 艸 几 艸 隣 四 圭 雪

愛せずも花に若やぐ老だうな
うら門付る垣の山吹
米^(ナ)かすもかまはで通る蜆舟
地藏を建し夢の浮橋
笋の制札うすき冬枯て
ようはづれずに寐たる木枕
天井をけはなして置座敷鞠
みな刈込や里の夏物
秋の蚊のばらく出し八ッ下
あつさは残る馬の腹掛
錢形の竹つるしたる軒の月
きるもの着よと母のせわやく
打れたる瘤は付屬の證據なり
さながら風を薄墨の竹
手分して赤飯くばる大井殿

荷 去 集 晋 岩 轍 尺 荷 横 心 嵐 野 岩 風 集
今 來 加 子 翁 士 艸 兮 几 圭 雪 童 翁 國 加

おかしくあたる百姓の弓
日の色に心さだまる鐘樓守
行脚の笠に袋して置
河風にしろき諷をはりあげて
新大橋の富士もよく成
なつかしや切干下す尾張宿
むしろに書た賤の手質
外しらぬ琴を悲しむ花の前
艸芳しき信の交り

晋 轍 尺 心 去 荷 重 桃 横
子 士 艸 圭 來 兮 勝 隣 几

此一帖者於落柿舎書校合決

井づゝや
寺町二條 重 勝 判

追加

於義仲寺六七日

花鳥にせがまれ盡す冬木立
 藥の紙の霜にしほるゝ
 隅くに火鉢の炭をかた寄せて
 明日の天氣を亭主請とる
 月影に綿抱へこむ柿ふくろ
 かしらにつれて揃ふむしの音
 茸狩りはこそりゝと道かへて
 庄屋の觸にたのむ代判
 角罎は今にかゝさぬ家中風
 なまり詞に國の名物
 もや柴てひつしと構ふ雪さくみ
 老ぬるねこの瘦はてゝなく
 恵心佛守て出たつ秋の旅

惟 然 正 秀 臥 高 探 芝 昌 房 游 刀 丈 艸 執 筆 胡 故 直 愚 上 人 智 月 惟 然 正 秀

前に當たは鹿兒島の月
 朝霧に繪の具の箱の蓋あけて
 茶を情出してはこぶ弟
 とつくりと花に夕日の入すまし
 つゝじの株にひかる山どり
 鋏打に隣つれ立はるの風
 芝居太鼓の拍子ぬけする
 むづかしき思案を無理に書破り
 物見あつめてはいる寐どころ
 擗うらに波のよせくる家づたひ
 若衆の髪に氣を付てやる
 照月を海老名の陣に參る也
 秋の小草にまじる隈ざゝ
 うれしがる階子の下のにごり酒
 砂鉢の鮫は双六のかけ

臥 高 昌 房 游 刀 丈 艸 胡 故 直 愚 上 人 魚 光 探 芝 微 房 川 支 丈 艸 乙 洲 曲 翠 臥 高 蘇 葉

相合の鐘を持せる道奉行

奇麗にはるゝ雨の卵の花
 立ならぶ蛤ふみのものおもひ
 きのふの事を三味線にひく
 いり口のめつたに多き門徒でら
 なじまぬうちはつなく庭鳥
 こつそりと散て仕廻し花の跡
 むくゝあくる芝のかげろふ

歐仙滿座計音之吟

肩うちし手ごゝろに泣こたつ哉
 此悔や臍の緒切てけさの霜
 冬の蝶存きられぬわかれかな
 寒牡丹櫛に添るなげき哉
 燭消て闇に成けり冬ごもり
 簑むしも木に離れたる落葉哉

枯尾花

牝 支 關 阿 胡 故 惟 然 這 萃 朴 吹 曲 翠 昌 房 美 濃 大 垣 竹 戸 荆 口 斜 嶺 文 鳥 怒 風 殘 香

あら土の墓もはかなや霜ばしら
 草鞋の跡なつかしや勢田の霜
 冬ごもり飯にうへたるたうとさよ
 文あけて氷る涙や人の透
 泣入て加減の逢ふ寒さかな
 雪霰いつをなみだのとめどころ
 蓮の葉の枯れて甲斐なき泪哉
 請る手に佛見へよ墓の霜
 木がらしに便りも遠き手むけ哉
 切石をなでゝ泣けり今朝の雪
 十方なき泪や枯るゝ柳かげ
 月代をそらでも寒し塚の前
 分朝はゝや霜や置そふ頭陀袋

興行

霜月十六日芭蕉翁三十五日於義仲寺

胡 風 黃 逸 朱 迪 里 東 野 徑 蘇 葉 支 幽 竹 官 裾 道 教 清 柯 山 及 肩 鳩 枝

桔尾花

墓近く蓮の香を持ッ氷かな

たてゝはあくる冬の柴の戸

跡先に寐に来る鳩の待つれて

四句目より略之

桃隣

智月

正秀

書林

井筒屋庄六衛
橘屋治兵衛
板行



昭和十年九月十五日印刷
昭和十年九月二十日發行

俳人其角全集 第一卷
頒價 二圓

編纂者 勝峯晋風

東京市本郷區金助町六十番地

發行者 遠藤滿

東京市四谷區本村町四番地

印刷者 鈴木芳太郎

發行所 彰考館

東京市本郷區金助町六十番地

電話小石川五三〇番
振替東京五八〇四六番



